

群馬とヨーロッパ

日本の歴史の中で、養蚕産業は本州の中部と北部に位置していた。しかし、伝統的な絹織物産業は、京都で整備されていた。1720年代には、日本の絹織物のおよそ90パーセントが京都で作られていた。福島や新潟などの地域において、繭が収穫され、巻き取られ、生糸の長いかせが作られたのち、京都に出荷された。1800年代後期まで、この流れが標準となっていた。

1860年代、ヨーロッパの優れた絹生産国であるフランスとイタリアは、蚕の病気との生死を賭けた戦いの最中にあった。このような病気は、絹産業自体を滅亡させる恐れがあった。1870年代、健康のある蚕と絹を持って自国からヨーロッパに渡航し絹産業を救済する日本人蚕商人が現れるなど、誰も予想していなかった。絹はすぐさま、日本政府の主要な収入源になった。

1872年、明治政府は高品質の生糸の生産を保証するため、富岡製糸場を作った。この工場は、蒸気機関や製糸機械などの西洋技術を取り入れた、当時では最先端の施設であった。これらの技術は、フランス人の絹専門家ポール・ブリューナ（1840～1908年）によってフランスから持ち込まれ、据え付けられ、運用された。この工場は、群馬の絹産業の繁栄の一部を示すに過ぎなかった。群馬には、初の養蚕学校や蚕種の大規模な冷蔵施設があったほか、絹産業を発展させた多くの発明家が居住し、仕事に励んでいた。

20世紀早期までに、日本は世界最大の絹生産国となり、世界の生産量のほぼ60パーセントを占めていた。ヨーロッパの絹産業は壊滅を免れ、日本の絹は高い評判を得るようになっていた。そしてこの群馬西部の小さな地域が、世界規模で注目されていた。この地域で生まれた高山長五郎（1830～1886年）、木村九蔵（1845～1898年）、田島弥平（1822～1898年）らは養蚕界の先駆者として、出生地である群馬、そして日本全体の未来を形作るのに大きな貢献を果たしていた。